

（主君蟬吟に節事し在當時の巻集の句）

以上は高木會長の津市四天王寺訪往の記に導かれて、藤堂氏と依伯氏の關連を述べたものだが、伊賀上野の藤堂家のことについて、同地の郷土史家葛山當年男氏の著書に採つた。

さて大友興廢記の一節に、

『 爰に、予が依ふる大神の惟重氏、先祖緒方三郎惟宗より、子々孫々大友家敗れに任たりき。然れども、今や分の由緒は、勢陽の地に未住し至ふ。住國の時以相隨し者共々、大半離群索居すといへ共、吾儕少々残り侍りぬ。』

と著者杉谷宗重が伊勢に住居した依伯氏のことについて少しばかりふれている。この杉谷氏は依伯惟定に従つて朝鮮の役に奮戦し、また伊勢津に移住した。この杉谷惟之の子孫が、その一族であるに相違ない。興廢記卷二の杉谷遠江守の事、の項に、遠江守宗故の二子杉谷次郎太郎（宗泰）弟次郎三郎（惟長）が依伯惟常に従つて高野山城攻略に拔群の功名をたてたことか述べられてゐる。諱名その他から見て、宗重はこれらの人々の子孫、従つてこの伝承は杉谷氏に伝わつた氏族の由緒である。興廢記著者杉谷宗重は同書卷二十『鎮座龍』の事とのべた項に、自らを経歴にふれて、

『 予豫て鎮西豊後陽を去り、勢陽（伊勢）に住侍りき。累歳を経て、又旧里に再来し、鎮座の瀑布を見て、前きの詩の金言、今又太に深し。云々』  
と記し、自作の一詩を載せてゐる。

日輝瀑布吐長虹  
六月雪花籠岩上  
千尺飛瀑一望中  
三冬雷鼓殿天空  
盧峯今見青山色  
季瀉曾思瀾江

更忘二人間、興尤夥

若非仙境一定龍宮

鎮座は現在の池田である。宗重は伊勢に移つた後、何年かを経て再び豊後に來遊したものであらう。惟定が伊勢に移つたのは藤堂高虎が安濃津三十二万石に封じられた慶長十三年以後と思われるから、杉谷宗重が伊勢に住したのも同年以後であらう。大友興廢記の著者はたゞの序文から推測して寛永十二年から十四年の間である。おそらく宗重は文筆の人として抜擢の話を聞き、父祖の地とそれを目で見たいと思つたのであらうか。彼が豊後に再来したとき、どんな道程を辿つたかはわからぬが、興廢記の記述から見ると大野郡緒方、三重地、古戰場と訪ねたらしく、若しかしたら岡領（三重、宇目方面）から伏見領（河内）に入り、縁談の者を尋ねたのであらうか。

（おわり）

偶感

文化財の保存と展示

伏見桃山城と吉野の史蹟を訪ねて

高木 嘉吉

先般私は、復元された伏見桃山城を見学し、又多年の念願であつた吉野の旧蹟を訪ねた。

伏見桃山城は昭和三十年三月に竣工したもので、東山山系の南端伏見桃山御陵と指呼の地にある。遊園地化した大広大な丘陵の上には、大天守閣と小天守閣が互に高く聳えてゐる。

五層七重の七天守閣には、地階から五階まで豊臣香吉を中心、織田信長、徳川家康に關する所謂安土桃山時代の文物と、明治天皇、昭憲皇太后ゆかりの品々が数多く展示されてゐる。こんな数に多數の品が失われずによく残されたものだと、且つ驚き且つ喜んだものがあるが、吉野に到つて更に此の感を深くした。

吉野は花が散つて、葉桜にはまだ早い風情のない時であつたが、取書よりも軍書に惹き吉野山への探訪を目ざす私にはそれは問題でなかつた。蔵玉堂、吉水神社、如意輪寺等の宝物館には、南朝五十余年の血涙史を語る数々の遺品が陳列されてゐる。更にさかゞびつて源義経や後妻静の遺跡遺品に接したのも嬉しいことであつた。

と云つて、伏見桃山城及び吉野に共通して私の関心事となつたことは、個人所有の品が沃山出品展示されてゐることである。詳細な所有者の紹介及び由来書が添えてあるので、読む程に温かい息吹に接する様である。伏見桃山城には京阪神の人、吉野には京阪神をはじめ吉野近郊の人の出品が多い。

ここで考ふる。文化財は個人が所有して愛蔵し鑑賞すること勿論結構であるが、それでは死蔵の感がないでもない。之を前記の様な施設に出品展示して、広く天下の人々に鑑賞させることは、日人とうに我を生かす道ではあるまいか。そこには嚴重な保管、管理を前提として、所有者と借受者との間に幾多の解決せねばならぬ問題があることは当然であるが、それ等と乗り越えて展示には頭の下るものがある。

佐伯市で待望の文化会館が建設に向つて歩を進めてゐることは同慶の次第である。そつとその一郭に文化財の展示場が設けられる由で、これも嬉しいことである。此

の際市当局も個人所有者も先達地の例にならつて、出陣展に踏切つてはどうか。敢て一言を呈して関係者の考慮を求めらるゝのである。

研究

疫 神 齋

佐伯地方の祭祀 (八九)

五十川 千代 見

南海部郡弥生町大字は良字祇園に鏝屋する八坂神社の祭祀、旧曆正月二十九日へ大安日に當るに、毎年きまつて神社の境内で「疫神祭」へえきしんさい」といふのが執行される。それを紹介して見よう。

疫 神 塚 作り

立春の日(以前は旧曆で祭日の二十日)と前の大安の日(に)依る。八坂神社の神威左側の一畝高いところ、十玉坪ほどに玉垣の内に三四人で作る

疫神塚作りは必要なものだ

◇ 厄久米笹(端出之笹)普通シメ笹と呼んでゐる

長さ 二十四尺 八本

長さ 六十尺 一本

長さ 九尺 三本

◇ 竹(佐伯地方で男竹といわれている)

長さ 八尺 径一〜二寸程度 十二本

長さ 五尺 径一〜二寸程度 八本

(以上)